

◇◆慶應義塾大学大学院経営管理研究科(ビジネススクール)
「実践的授業方法について考える」ニュースレター(第23号・2008/11/28)◆◇

ニュースレターの第23号をお送りします。今月から千葉大学教育学部准教授岡田加奈子先生の実践的授業取組をお届けします。岡田先生には、養護教諭の養成のための実践的授業取組について3回にわたってご紹介いただきます。

コンテンツ

本号のお知らせ
(イベント情報などをご案内します)

実践的授業法取組紹介
(実践教育に鋭意取り組まれている先生方の手記を掲載しています)

ショートエッセー
(実践的授業方法に関するエッセーを掲載しています)

□■□本号のお知らせ.....

慶應義塾大学大学院経営管理研究科ケースメソッド授業法研究普及室では今年度の後半に、ケースメソッド授業の実践に関する研究集会とシンポジウムを計画しています。詳細が決まり次第、このニュースレターでご案内いたします。

.....

慶應義塾大学ビジネススクールのホームページからニュースレターのバックナンバーがご覧いただけます。バックナンバーを一覧するページをリニューアルしました。興味のあるエッセーが探しやすくなっています。こちらからどうぞ。

↓

http://www.kbs.keio.ac.jp/gp/gp_news.html

.....□■□

□■□実践的授業法取組紹介.....

このコーナーでは、大学教員による実践的授業方法への先進取組を「私の履歴書」風に紹介してまいります。今月は千葉大学教育学部で養護教諭養成に尽力されている岡田加奈子先生の第1回をお届けします。

～コーディネーターとしての養護教諭の養成～

千葉大学教育学部養護教諭養成課程
准教授 岡田加奈子先生

【第1回】今日の養護教諭の仕事

（次回以降の予定：仮題）

第2回 養護教諭教育の課題とブレイクスルー

第3回 私たちの養護教諭養成取り組み

私の専門領域は養護教諭の養成教育で、平たく言うと、学校の保健室にいる保健の先生を育てることです。3回のニューズレターを通して、「保健の先生の仕事とは？」「どんな能力が求められるのか？」を紹介しながら、「どのような教育によって養護教諭を育成するか？」というテーマについてお話したいと思います。

保健室の先生の仕事と言えば、学校で怪我をした子どもに保健室で救急処置をしたり、授業中に具合が悪くなった子どもをベッドで休ませている姿を思い浮かべる方が多いでしょう。確かに以前はこのような仕事を中心だったのですが、保健の先生の仕事の中身は今や大きくふくらみ、多様で複雑になっています。

例えば、今の学校の教室には、ADHD(※)やLD(※)の子どもがごく普通に存在します。教室の中をふらふらしている子どもが少なくなく、特別支援教育の必要性が増しています。「保健室登校」の子どもも多くみられます。ご存じのとおり健康相談活動と呼ばれる「子ども心のケア」も重要な仕事になっています。

それ以外にも今日の保健の先生は、保健の授業や保健指導など、子どもに対する健康教育全般を受け持っています。健康問題は学力の基礎になる一方、健康問題への対応はますます難しくなっているため、養護教諭への期待がいつそう高まっているのです。そんな期待に応えるのが今日の養護教諭のあるべき姿なのですが、それは決して簡単なことではありません。

なぜなら、今日の子もたちが抱えている健康問題には、とても1人では対応できないからです。学校内の先生方やスクールカウンセラー、学校外では、保護者、地域、病院、警察、いろいろな相談機関などと連携を持ちながら対応していかなければいけないのです。そうすると、健康問題の最前線にいる養護教諭はいわゆる「赤チン先生」ではもはや不十分で、「健康問題解決のコーディネーター」となって、連携の中心的な機能を担う人物にならなければなりません。

このように今日の養護教諭には、学内外の関係者と情報を共有する能力や相手を動かす能力を兼ね備えた「連携のコーディネーター」「協働のキーパーソン」という新しい能力が課されはじめております。

ところが、養護教諭はたいてい1校に1人しかいませんので、同業の先輩に助けてもらえるチャンスがありません。そうすると1年目の新人養護教諭であっても、仕事は新人の時からできないといけません。ある程度の実践力をもってから卒業しないと、養護教諭本人も周囲の関係者も、問題に直面する度に苦しむことになります。

また、学校の教員という仕事は、「学級王国」という言葉があるとおり、自分の仕事場、すなわち担任する教室の様子が同僚の目に触れにくいので、教室運営が担任にまかされるという一面があります。その意味では保健

室も同様、あるいは他の先生と専門性が大きく異なる分、一層「保健室王国」の危険があるわけです。

その人のすべての行動がオープンスペースで行われている仕事と、クローズスペースで行われている仕事は、成長の仕方が違うような印象をもっています。後者の場合、培われた経験が自分の中で積み上がっていった、「自己成長」は遂げられるのですが、その経験を他者と共有して「相互成長」することが困難といえましょう。したがって「自己成長」の比重が大きくなりがちといえましょう。

保健室の養護教諭を取り巻く環境が大きく変化した今日、コーディネーターの役割を担う養護教諭を大学でどのように育てるかには大きな課題になっています。今回は養護教員養成の歴史を振り返りながら、今日における課題について述べる予定です。

(※)ADHD

注意欠陥・多動性障害(ちゅういけっかん・たどうせいしょうがい)

ADHD: Attention Deficit Hyperactivity Disorder は多動性、不注意、衝動性を症状の特徴とする発達障害もしくは行動障害。

(※)LD

学習障害(がくしゅうしょうがい)

Learning Disorders, Learning Disabilities, LD は、複数形で表記されていることから分かるように、単一の障害ではなくさまざまな状態が含まれる。

..... □ ■ □

□ ■ □ 実践的授業方法ショートエッセー.....

このコーナーでは、実践的授業法取組で紹介した内容を、ショートエッセイ形式で解説しています。

第22回

大学でねらえる“Profession”教育

「養護教諭を大学でどのように育てるか」。これが今月から3回に渡って探求するテーマである。今回寄稿していただく岡田加奈子先生がKBSで開講している「ケースメソッド教授法」の教室に参加され、筆者が岡田先生と出会ったのが去年の秋。それ以来、大学あるいは大学院で行う実践教育のあり方について、しばしば議論をさせていただく間柄になった。

岡田先生の初回を拝読して筆者が目にしたのは、今日の養護教員像として「連携のコーディネーター」「協働のキーパーソン」という役割用語が登場していることである。このふたつの役割を深く理解し、そのような機能を積極的に果たしていく養護教員を育てるとなると、養護や健康教育に固有の知識や能力という枠組みを越えて、その外側にある能力も視野に入れて教育を行わなければならない。

岡田先生がそのような教育に取り組もうとしているということは、実践教育の新しいトピックとして、たいへんに興味深い。次回以降、教育上の工夫の中身が紹介されるはずだが、カリキュラム、授業サイト（実施場所）、授業方法、教材のどのあたりに工夫の焦点が当てられているのかを楽しみにしつつ、筆者のエッセイでは大学で行う“Profession”教育について、先に考えておきたい。

大学は伝統的に学問の中心拠点となる学府であり、そこで行われる教育は特定スキルの獲得を目指す職業訓練とは一線を画してきた。学問を修めることにより、そのこと自体が職務に直接的に役立つものにならなくても、職務能力とその形成過程を根底で支える理解力、分析力、表現力などの基盤能力が涵養されると考えられてきた。

経済学部の卒業生がみなエコノミストになるわけではなく、法学部の卒業生がみな司法職に就くわけではないが、大卒者ならば職場で高い職務能力を身につけ、発揮してくれるようになるだろうと社会は期待する。こうした社会通念は、大卒者は上述した基盤能力が高いがゆえに、応用能力もうまく獲得してくれると期待してよいだろう、という合意を形成している。

それでは大学教育では“Profession”を積極的に意識しなくてもよいのだろうか。この問いに対してイエスと断言できる人は、今日ではおそらく少数だろう。考えてみれば大学教育にもさまざまなバリエーションがある。リベラルアーツを標榜する教養学部もあるし、大まかな職業方向性だけを見据えた経済学部や工学部もあるし、かなり具体的な職業への就業を想定した医学部、薬学部、教育学部などがある。

また同じ工学部であっても、広範なカリキュラムを組むこともできるし、“Profession”教育を意識したカリキュラムを組むこともできる。これは、ビジネススクールで経営学を講義中心に教えるカリキュラムを組むこともできるし、ビジネスリーダーに必要な能力を磨き上げるためにケースメソッド授業中心のカリキュラムも組めるのと同じである。

このように考えると、大学教育では、カリキュラムの設計段階において、“Profession”教育の志向度合いを、カリキュラム設計者が選択している。問題は、「ある度合い」を選んでいくという自覚のもとに、カリキュラムを意図的に設計し、授業によってそれを機能させ、適宜改善できているかどうかである。

大学教育の中でも教育学部は、岡田先生のフィールドである「養護教諭養成課程」のように、非常に具体的な職務に就くことを想定した「〇〇養成課程」という言葉が語末につく教育プログラムが数多い領域である。このような課程では当然ながら“Profession”教育をねらいやすい。その中でも特に“Profession”教育に対して野心的な岡田先生のような研究者には、“Profession-Education Fit”という発想が生まれるのだろう。

岡田先生のエッセイでは、最初に“Profession”としての養護教諭の職務特性が詳細に洞察されている。紙面の都合で書かれている内容はそう多くないが、岡田先生の意識下では相当詳細に検討されているはずだ。しかもエッセイでは、養護教諭をめぐるダイナミックな環境変化を捉えて、今日の保健室で大きく求められている職務特性を明確にクローズアップさせている。

一校に一人しかいない養護教諭は、職場での OJT を指導してくれる先輩の力を借りずに一人前にならないことも明らかにされた。“Profession”教育の完成度を高めて人材を輩出すべき養護教諭養成において、岡田先生はどのような教育変革を考えているのか。次回に期待したい。

（文章 竹内伸一）



このメールマガジンは毎月1回発信しております。

~~~~~  
○お問い合わせ先

慶應義塾大学大学院経営管理研究科  
ケースメソッド授業法研究普及室（高木晴夫研究室内）

[kbsnewsletter@info.keio.ac.jp](mailto:kbsnewsletter@info.keio.ac.jp)

○慶應義塾大学大学院 経営管理研究科ウェブサイト

<http://www.kbs.keio.ac.jp/>

○慶應義塾大学大学院 経営管理研究科 文科省特色GP事業ウェブサイト

<http://www.kbs.keio.ac.jp/gp/index.html>  
~~~~~

発行者 高木晴夫

編集者 竹内伸一、住吉みどり、河井純子

次号（第23号）は2008/12/26にお届けする予定です。

ご意見、ご感想、購読者のご紹介は kbsnewsletter@info.keio.ac.jp 宛に、また、メール送信先の変更を希望される方、購読を希望されない方、購読を中止したい方は、お手数ですが kbsnewsletter@info.keio.ac.jp までご一報ください。次号発信日の前日までのご連絡に対応させていただきます。

当メールマガジンの内容を転載する場合は、ご一報ください。